

入選

テーマ：誰かのために、わたしができること
「私ができること」

茨城県立並木中等教育学校5年 福島 未久

「ウチって、ガンなんだって。やだな……」
ある日、一通のメールが私のもとに届いた。しかしその内容は、すぐに理解できるようなものではなかった。

私と彼女の出会いには二年前の夏休み。同じミュージカルの舞台に立ったのがきっかけだった。私たちはすぐに仲良くなり、その後毎年、夏休みに一緒にステージに立った。

髪が長くてバレエとピアノが得意で、少し生意気だけど憎めない、普通の十二歳の女の子。だからこそ信じられなかった。頭の中が真っ白になって、身体が凍りついていくのを感じた。ついこの間まで一緒に笑いあっていたのに。舞台が終わってからは、毎日のようにメールをした。手元にあるはずのスマートフォン画面が、どこかとても遠くにあるような感覚。何度も耳にしたことのある「ガン」という言葉が、妙に心に絡みつく。まるで初めて聞いた言葉のようだった。

「だから、抗ガン剤を使っただって。髪の毛が抜けたら、やだなーって思う」。

すぐに生えてくるから大丈夫だよ。私は、そう言って励ますことができなかった。私も彼女と同じくらい髪が長い。大切な髪を失うことの辛さが痛いほど分かる。生半可な気持ちで言葉をかけてはいけないうような気がした。

先日、私は彼女に会うために大病院を訪ねた。彼女のためにできることはないかと考えて起こした行動だったが、正直、怖かった。私知知っている彼女ではなくなくなってしまったのではないか、そんな気がした。

でも、そこにいたのは、数週間前と変わらない笑顔の彼女だった。つられて私まで笑顔になり、あっという間に時間が過ぎた。

「いつもメールで娘の話し相手になってくれてありがとう。娘も、みくちゃんみたいなお姉さんが欲しいと言っています。これからも、よろしくね」

彼女のお母さんは、私にそう言った。私は思わず胸が熱くなった。本当に嬉しかった。

一年前、十六歳の誕生日の翌日に、私は初めて献血をした。そしてその後も、できる限り通っている。骨髄バンクのドナー登録はまだできないが、十八歳になったらする予定だ。誰かの助けになりたい、その一心だった。

けれど私がしていたことは、ただの自己満足だったのかもしれない。思い返すと、私は人と直接関わるボランティアをしようとしたことがなかった。「面倒くさい」「怖い」そういった感情が、私の中にあつた。共に生きるということは、誰かを助けてあげることではなく、誰かの心に寄りそうことなのではないか。そう、私は気がついた。誰かがそばにいてくれるだけで、その人にとつてのエネルギーとなり、生きる力となる。

私は将来、たくさんの人を笑顔にできるような仕事がしたい。大好きなミュージカルを通して、老若男女問わず、健康な人もそうでない人も、みんなを笑わせることができればいいなと思う。肉体的な面だけでなく精神的に支える。共に生きるという点で、大切なことだ。

そして来年、私はずっと伸ばしてきた髪の毛を、バツサリ切ることにした。「ヘアドネーション」。髪の毛を寄付する活動のことだ。病気で髪をなくした子どもに、人毛でつくったウィッグを無償で提供している団体に、自分の髪の毛を寄付するつもりだ。髪の毛のことで悩んでいる子どもたちの心の支えに、少しでもなれたらいいなと思う。それだけではない。これからは人と直接関わることでできるボランティア活動にも、積極的に参加しようと思う。高校生の私にだって、できることはまだあるはずだ。

今、私の手の中には一つのお守りがある。彼女とお揃いでつくった、名前入りのお守りだ。彼女の病気が、一日でも早く良くなりますように。そして一人でも多くの人々が、笑顔で暮らせますように。そう、願いを込めて。